

南東北グループ 医療法人財団 健貢会

総合東京病院通信

2021.12

Vol. 110

●編集・発行／総合東京病院

医療連携支援センター 地域連携室 TEL:03-3387-5444

特集

治る認知症

慢性硬膜下血腫について



脳神経外科

山田 理

日本における65歳以上の方の4人に1人は、認知症またはその予備軍といわれております。認知症の多くは、お薬で進行を緩徐にすることはできても治すことができないのが現状ですが、慢性硬膜下血腫（まんせいこうまくかけっしゅ）は治すことができる数少ない認知症の一つです。今回は、慢性硬膜下血腫についてお話ししたいと思います。

■慢性硬膜下血腫とは？

慢性硬膜下血腫は、脳を包む膜（硬膜）と脳の表面との間に徐々に血のかたまり（血腫）がたまる

病気です（図1）。軽く頭をぶつけるなどの頭部外傷が原因となることが多く、受傷から数週間～数か月経って発見されます。とくに高齢の方、血液をサラサラにするお薬（バイアスピリン、プラビックス、プレタール、ワーファリン、イグザレルト、エリキュース、リクシアナなど：脳梗塞や心筋梗塞、心房細動などに対して処方されます）を飲んでいる方、お酒をよく飲む方は発症のリスクが高く注意が必要です。

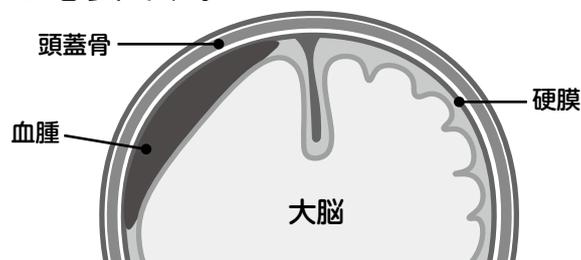


図1 慢性硬膜下血腫

硬膜と脳の表面との間にゆっくり血腫がたまり、脳を圧迫します

■慢性硬膜下血腫の症状

血腫が小さい場合は、無症状のことがほとんどですが、血腫が大

寄附金のお願い

～新型コロナウイルスから患者さんを守るために～

寄附金は、病院の施設や環境の整備、新しい知識や技術などの研究開発、医療スタッフ育成のための経費に活用させていただきます。皆さまからのご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

お問合せ

総合東京病院 寄附受付係

TEL: 0570-00-3387 メールアドレス tokyo-hp.kifu@mt.strins.or.jp

詳細はこちら



特集 治る認知症 慢性硬膜下血腫について

きくなって脳を圧迫するようになってくると徐々に症状が出現してきます。多くの場合、最初は眠りがちになる、活気がないといった症状から始まります。次第に、歩行がおぼつかなくなる、片側の手足が動かしづらい、しびれが出る、頭痛がする、しゃべりづらい、もの忘れをするようになった、トイレに間に合わないといった症状がみられ、重症の場合は、意識障害を起こすこともあります。発症するまで時間がかかるため、本人は頭をぶつけたことすら忘れている場合もあり、高齢の方では「歳のせい」にされてしまうことも少なくありません。

■ 慢性硬膜下血腫の診断と治療

慢性硬膜下血腫は、頭部CTやMRI検査で診断がつきます。慢性硬膜下血腫が確認され、症状がある場合は、手術を行うのが望ましいとされています。局所麻酔で頭蓋骨に小さい穴を開け、チューブを入れて血腫を取り除く穿頭血腫除去術（せんとうけっしゅじょきょじゅつ）を行います（図2）。手術時間は30分程度で、術後は回復する見込みが高いことが特徴です。血腫の量が少なく症状がない場合や高齢などの理由で手術が行えない場合には、薬物治療を行うこともあります。約1割の方で再発するといわれているため、治療後も頭部CT検査などを定期的に行う必要があります。

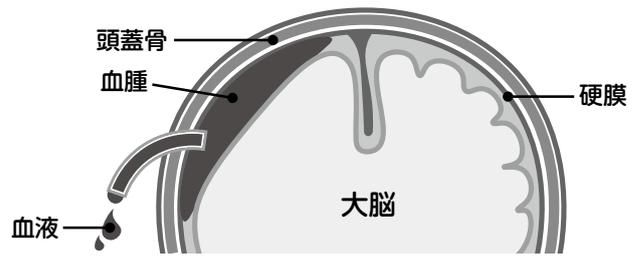


図2 慢性硬膜下血腫の治療
頭蓋骨に小さい穴を開け、チューブを入れて血腫を取り除き、脳の圧迫を解除します

■ 慢性硬膜下血腫の予防

いちばんの予防法は頭をぶつけないよう転倒に注意することです。ご自宅の家具やコードの位置を変えたりすることで、転びにくい環境を整えることが大切です。また、頭をぶつけたときに外傷や変化がなくても数週間～数か月後に症状が現れることがあるため、頭痛や記憶力の変化などがないかに注意して生活することが大切です。

認知症状が急に現れた場合、この病気が隠れている可能性があることを心に留めておいてください。「歳のせい」「認知症が始まったかな」などと片付けてしまわないで、医療機関を受診していただくことをおすすめします。

認知症が気になりましたら…
慢性硬膜下血腫の
可能性があります

脳神経外科を
ご受診ください



ご予約:0570-00-3387(予約・相談ダイヤル)